
先輩と僕

送り狗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩と僕

【Nコード】

N8171X

【作者名】

送り狗

【あらすじ】

天然でふわふわしている先輩と、先輩のことなら誰にも負けない僕の何気ない日常会話。時折出てくる先輩と僕以外人達との日常会話もまたほのぼのとしていたり、笑えたり、一話が1分もかからず読めてしまう、ショートショートなお話です。

暇な僕（前書き）

女の子と2人っきりの部屋で僕は何をすればいいのだろう？ 可愛
い先輩をからかうのか、空気に耐え切れずに助けを呼ぶのか。僕は
逃げ出さない。

なぜなら……先輩をからかうのは僕1人で十分だから！

暇な僕

どこかの高校の、どこかの部室で、先輩と僕のなにげない会話が始まる。

4時35分。もうすぐ5時になる。今、僕はとても暇だった。どれくらい暇なのか例えるなら、校長先生の挨拶くらい暇だ。

（はぁ……暇だ。何か面白いものはないかなー あっ先輩発見！）

クルツと首を動かし部室の中を見回すと、僕のすぐ近くだけど、決して近くも遠くもない距離に先輩がいた。

今日も先輩は、お決まりのように本を読んでいる。

「ねえ先輩、バナナって10回言ってみてください」

「ん？ なんで？」

本を読んでいた先輩は、本から顔を上げると首を傾げている。

「いいから、きつと面白いですよ」

「そうかなー じゃあ、バナナバナナ バナナ。はい、言ったよ」

素直に言ってくれる先輩。可愛いです！

「先輩は？」

「バナナ！」

予想以上に可愛い先輩。これはもうからかうしかない。

「わーい 先輩バナナー！」

「なっ！？」

僕にそう言われると、自分の言い間違えに気がついたのか、先輩は顔が真っ赤になり慌てだした。

「や、やめなさい！ わたしはこれでも君の先輩なのよっ」

「えー 自分のことをバナナと言ってしまっ先輩には、どうにも説得力がありませんね」

僕が返した言葉のほうの説得力があったようで、先輩は押し黙ってしまう。

（わっ、ちょっとやり過ぎてしまったかな？）

「す、すいません。少し言葉がきつかったかもしれません」

僕は少し言いすぎてしまったと、先輩に謝った。

「せ、先輩？」

しばらく経っても返事が来ない。僕が心配をしだしたころ、先輩がようやく喋ってくれた。

「わ……わたしは……バナナじゃない……もん……」

下を向いていた先輩はゆっくりと僕を見上げると、赤面した顔のまま僕にそう言った。先輩と一緒にいるとも思っていたが、今日はいつにも増して思ってしまった。

（先輩可愛い　　っ！！！）

暇な僕（後書き）

一話完結のショートな話です。

感想など書いてくれると嬉しいです。

驚く先輩（前書き）

驚いた先輩と僕の話

驚く先輩

「きゃああああ　　！！！！」

僕と先輩しかいない部室。先輩はいつもどおり本を読み、僕は惰眠をむさぼる。そうして過ごしていた僕は先輩の悲鳴で目が覚めた。

「ぬうお！？　どっとうしたんですか先輩！？」

「くっ黒いものがっ！？　わたしの足元を黒いものがっ！！」

「黒いもの？　動いて黒いもの？　それってゴキ……」「その名前を言わないでっ！！」「……」

僕が首をかしげながらその名前を口に出そうとすると、先輩が必死になって遮ってきた。

「黒いもの　　例のあのヒトがあ！！　なんとかしてよ君。男の子でしょ！」

「！？」

今日の先輩は混乱していた。混乱した先輩はそのまま訳の分からないことを口にします。

「例のあのヒトがいたっていう事は、ここにはもっと居るっていうわけで……部費でホイホイを１００個くらい買わないとお」

「せつ先輩！ そんなに置いたら足の踏み場もなくなりますよつ！
それに今居るのは一匹です。それさえ退治すればいいじゃないで
すか！？」

「その名前を言わないでっ！！」

「名前言つてませんよ！？」

しかし、怯えている先輩もまた可愛いが、いつものように明るい先
輩が一番可愛い。

（先輩を怯えさせるなんて……これは僕がゴキ……『言わないでー
！！』……例のあのヒトを退治するしかない！）

「先輩は廊下に出ていてください。ここは僕が何とかしますんで」

「わっ分かったあ……」

そう言うと、先輩は廊下に出ていく。扉が完全に閉まるのを確認す
ると僕は行動を開始する。

「先輩を怯えさせるヤツは僕が許さない。さて 覚悟するんだ
ね」

それから僕は、『てやあ、はあっ』と、例のあのヒトに苦戦し、勝
利する。

「先輩、もう危険がなくなりました。安心して入ってきてください」

「そう?」

扉からチヨコンと顔を出した先輩は中を覗くと、そろそろと入ってくる。

「ほら見てください。ヤツはいなくなりましたよ」

僕は両手を広げて部屋が安心なのを先輩に見せる。その様子を見てホッと一安心した先輩の目に何か黒いものが写ったらしい。

「きゃああああ　　!!!」

そうして本日二回目の、僕の戦争が始まった。

驚く先輩（後書き）

その後先輩は怯えてしまって、3日ほど部室に寄り付かなくなってしまった。

えんぴつと僕（前書き）

えんぴつを語る僕と先輩のお話

えんぴつと僕

『カリカリカリカリ……カリカリカリ』

先輩と僕の2人しかいない部室で、えんぴつが紙の上を滑る音しか聞こえてこない。

今日の授業でたつぷりと出されたレポート相手に格闘していたとき、左手に持ったえんぴつを見て、僕は唐突に思った。

「先輩、えんぴつって使ったことがありますか？」

窓枠に寝そべってひなたぼっこをしていた先輩は、僕の突然の質問にのんびりとした口調で答えてくれる。

「バカにしないでよ君。わたしはこれでも小学校6年生まで使っていたんだから！」

「小学校6年生までですかあ」

「先輩って、小学校6年生の頃から可愛かったんでしょね。あーあ、小学6年生の先輩が見たいなー」

僕がそう言ってしまったときにはもう遅く、先輩は熟れたトマトみたいに真っ赤になると、「そっそんなことなんもんっ」と、大変可愛らしかった。

実際のところ、僕は狙ってそう言ったのだけど。

「先輩。話は戻りますが、僕は今でもこうしてえんぴつを使っているわけですが、なぜだと思えますか？」

まだ顔が真っ赤のままの先輩に、僕は尋ねる。

「うえ？ えっえーと……わからないよ」

「そうですか……」

僕は先輩に分からないと言われたことが意外とショックだった。なんだろう？ この胸がズキズキする痛みは？

「まっまあ気を取り直して続きですが、僕はえんぴつが一番使いやすいと思っているんですよ」

「自分で削り、お好みの使いやすさにする事も出来る便利さ。芯の濃さや太さにも多様なバリエーションがあり、どんな場面でも活躍してくれること間違いなし！」

「そして極めつけは、小さくなったえんぴつの愛らしさ！ 小さくなってくると、そのえんぴつにも愛着が湧いてきますし、なんとなくキャップをつければ最後まで使えます！」

「まあ本当に小さくなってしまったえんぴつは、捨ててしまつです

が……」

「そして　捨てるときに物語が発生する！　今まで使ってきたえんぴつを手放してしまうという罪悪感。しかし、新しくえんぴつを使ってしまいたいという好奇心。なんてえんぴつは罪な存在なんでしょう！！」

「で、僕がえんぴつのことについて何を言いたいかと言うことです
が……えっあれっ先輩？　先輩！？」

先輩は、僕が語るえんぴつ愛についていけずに、脱落したようでした。

えんぴつと僕（後書き）

せんぱ

いっ！！

カムバアアア

クッ！！！！

おしくらまんじゅうと先輩（前書き）

おしくらまんじゅうがしたい先輩と僕の話

おしくらまんじゅうと先輩

「……おしくらまんじゅうがしたいなあー」

僕は部室でマンガを読んでいたとき、先輩が何の前触れもなくそう言っていた。

そんなわけで、思いつきり不意をつかれた僕は、「はいっ!？」と、素で返してしまう。

「なんて声を出しているの君。おしくらまんじゅうだよ、おしくらまんじゅう! きつと楽しいはずだよっ」

「あーちよつと待って下さい。おしくらまんじゅうは分かりますし、楽しいのも分かります。でも なんで今?」

「おしくらまんじゅうをしたことがあるの!？」

「???? 何ですか先輩?」

先輩が何かを言ったようだが、早口でうまく聞き取れなかった。

「えっ? いやあ……それはそのあ……そっそっ、昔を懐かしんでいたら、急にやってみたくなっただけだよっ」

「いや先輩、今何か言いかけてませんでしたか?」

誤魔化そうとする先輩に追求してみる。

「何も言っていないっ!!」

「はいっそうですねっ!」

誤魔化されました。

しかし……このように言ってなにか必死に誤魔化そうとする先輩。

しかし先輩! 僕は見ていました。先輩がさっきまで読んでいた本の内容が青春モノで、その中におしくらまんじゅうが出てくることをっ!

「安心してください先輩っ! 僕はさっきまで先輩が読んでいた本の内容に、おしくらまんじゅうが出てくることなんか誰にも言いませんからっ!」

「ああっ!?!」

先輩は顔を押さえながら、走って出て行ってしまいました。

おしくらまんじゅうと先輩（後書き）

この後先輩を捜しに言った僕は、先輩にポカポカと叩かれました…
…

自販機と僕（前書き）

自販機について語る僕と先輩の話

自販機と僕

僕と先輩がいつも部活をしている部室には、自販機がある。

部屋の作りはこの文化部の部室とも変わらない。特別な場所に部室があるわけでも、無理を言って設置してもらっているわけでもない。

でもなぜか、自販機が部室についている。

その自販機は今でも機能している。というか、一日一回は業者が来て補充までしている。ごくろうさま。

自販機の中身も、お汁粉などオーソドックスなものから、今流行の炭酸飲料まで各種取り揃え。非情に充実した自販機である。

その自販機の需要はあるか？　ない。

その自販機を使っているのは、先輩が僕か、隣や同じ校舎で部活をしている生徒だけである。まったくもってお金の無駄使いだ。

でも、先輩と僕はかなり重宝しているので、大事に思っている。

一度先輩に聞いたことがある。なんで部室に自販機があるんですかって。

先輩は、

「わからない」

と、言っていた。そして、その後続くように、

「わたしも昔気になって、一度先輩に聞いたことがあるんだけど、分からないんだって」

「わたしが聞いた先輩が言うには、その先輩も入学してすぐに先輩に聞いたらしいんだけど、分からないって。その先輩も、そのまた先輩も、そのまたまた先輩も知らないって聞いたよ」

「そしてわたしが思っていることなんだけど、この自販機にはすごい秘密が隠されていて、その秘密はきっと国家レベルで守られているんだよ！」

と、久しぶりに先輩が熱弁をふるっていた。僕は「そんなまさかあー」と言っていたが、もしそんな陰謀が隠されていたらどうしようと思ひ悩んだこともあったが、考えても仕方がないことに分類して思考を停止した。

しかし……僕が尊敬してやまない先輩は天然で、ちよつとふわふわしてみている危ないのだが、勘ばかりはものすごく良く、本当に心配している。

まあ今日は独り言をべらべらと喋っていたが、何が言いたかったのかというと、先輩は天然でふわふわしていて勘が良いということだ。

自販機と僕（後書き）

ちなみに僕と先輩がいる部室は、倒れてくる本棚で自販機が隠れているので、使用には注意が必要である

購買部戦争と先輩（前書き）

購買部戦争に挑む僕と先輩の話

購買部戦争と先輩

昼休み 朝、お昼ご飯を作り忘れてきた僕は購買部に來ていた。

聞いた話だけれど、うちの高校の購買部はお昼休みは大変混雑すると聞いている。僕は今まで購買部に足を運んだことが無かったので、いい機会だ。その大変混雑するという購買部を見ようじゃないか！なんて軽い気持ちできていた僕は、この高校の購買部での混雑するという言葉の意味の、スケールの違いに驚いた。

「うつわああ なんだこれ!？」

そこはまさに戦争とでも表現したほうが当てはまる場所だった。

我さきに弁当や菓子パンに群がる学生たち。押し合いで一歩も動くことができない状況。何よりすごかったのがその熱気だった。

「押すな押すなっ」

「おばちゃん！ コレくれっ！」

「おいっ コレは俺が先に目をつけたんだ！」

離れた場所に居る僕のところまで届く、その熱気と声。見ているだけで熱かった。

少し様子を見てみると、僕のクラスにいる熱血君こと皆みな太陽たいようがいた。太陽はこういう熱い雰囲気が好きなので、欠かさず昼飯争奪戦に参加しているのだろ。その証拠に、手際よく菓子パンを手に入れてはお金を払っている。

「おっ君じゃないか！ 珍しいなこんなところにいるなんて！」

さすが太陽というべきか、喋り方まで熱い。そんな太陽はチラッと購買部の方を見ると、珍しく戸惑ったような表情をしていた。

「君きみがいるってことは弁当を忘れたってことか？ 俺の菓子パンを分けてやるから教室にいかないか？」

「いやいや。それは太陽のお昼ご飯だし、僕が貰うのはなんか悪い。気にしないで、僕は自分で買ってくるから」

そういつて僕は購買部のほうに向き直り、気がついた。

『先輩が売り子をしている』

僕はそれを見た瞬間、購買部に駆け出した。後ろから「あーあ」と言う声が聞こえてきたが、気のせいだろう。

「とっつ！」

どうやってか僕でも分からないが、おしくらまんじゅう状態の最後

尾から僕はジャンプして最前列に降り立つ。周りの人は驚いている様子だったが僕は気にしない。驚いている先輩に向かって僕はお金を払おうと口を開く。

「先輩を1人下さい！」

「100万円になります」

「……100回払いの、ローンで」

今日は部室にいないときの先輩を見て、失ったものは大きいが、満足したことは伝えておく。

購買部戦争と先輩（後書き）

100万円はもちろん冗談だし、僕は先輩のエプロン姿を見て鼻血ものだったが、肝心なお昼ご飯を忘れていた。

泣く泣く帰ってきた僕は、太陽やクラスの子からお弁当を少しずつ分けてもらいました。

窓と僕（前書き）

イタズラな先輩と窓と僕の話

窓と僕

いつもの部室。いつもの時間。今日も先輩と僕は部室で思い思いの時間を過ごしていた。

平和という言葉以外見つからないくらいほのぼのとした空間。そんな空間で、僕は異彩を放っていた。

教室に置いてある机をいくつも並べ、ゴロゴロと寝転がっている。先輩と僕の２人しかいないため、目立っているが気にならない。そんな絶賛怠惰中の僕に、先輩が声をかけてきた。

「寒いーっ！？ 君、窓を閉めてくれない？ 窓から入ってくる風が肌寒いから」

顔を上げて見れば、窓が開いており、まだ肌寒い季節だということも相まって、入ってくる風が冷たい。

「はい分かりました」

僕はそう言って窓を閉める。

肌寒いこの季節、先輩に言われなくてもいずれ気が付き窓を閉めたと思う。しかし、

（先輩に言われて気が付くなんて末代までの恥だ……次からは先輩に言われる前に気が付かないと！）

そう決意して3分後、先輩から声をかけられた。

「暑い……君、窓開けてくれない？　なんか暑くなってきたから」

エアコン完備の我が部室、窓を閉めたついでにエアコンを入れたのだ。ちなみに28度設定。

はい、と言って窓を開ける僕。そして、エアコンの電源を消し、窓を少し開ける。

肌寒い風を感じながら数分後、先輩から窓を閉めてと言われる。そして数分後、窓を開けてと言われる。しばらくこんな事を繰り返すと……

「あーっ！？　君っ！！　嫌がらせされてるんだから気が付きなさいっ！？」

「なっなんだってええ！？」

手振り身振りのオーバーリアクションで驚くが　　知っていました。そんな事とつくに知っていましたよ、先輩！

先輩のお茶目なイタズラは逆に萌えると気が付かないと、どれだけ

の男が犠牲になるか分らない。

僕は目頭が熱くなるのを感じながら、肌寒い空に敬礼をした。

窓と僕（後書き）

この後、先輩に変なことを吹き込んだ人を探しに行くことにした
続く！

尋問と先輩（前書き）

尋問される先輩と僕

尋問と先輩

窓を閉め、カーテンを閉め、部屋の明かりを電球一個にした僕は、さらにカーテンの隙間から光が一切入らないようにガムテープを貼っていく。

そうして作り上げたほとんど闇の世界で、重々しく口を開き先輩に対して尋問を開始した。電球は僕と先輩の真上にあり、顔がわずかに見えるくらい。雰囲気は十分出ている。

さて、僕が尋問をする側、先輩が尋問をされる側。どうしてこのような流れになったのかと言うと、人をからかう事なんてしな**い**と思っ**て**いる先輩に好からぬことを吹き込み、先輩を悪の道へと走らせたことが理由だ。

「さて……先輩、先輩にこんなことを吹き込んだ人物を教えて下さい。その人に天罰が下りますから」

僕はニコニコ笑って尋問を開始した。

「ええーと……君、顔が怖いよ？ それと私は誰にも唆そされたりなんてしていないよ」

先輩は顔をこわばらせながらそう答えた。可哀想に先輩、そいつに言っつなつて脅おそされているんですね。

「安心して下さい先輩っ！ 俺は先輩が脅おそされて言えないってことは分かっていますから、話してくれても先輩を裏切ったり見捨て

たりするようなことはありません！ 安心して話してください、さあっ！」

僕は早口言葉のように言いたいことを言うと、先輩を見る。そんな僕の言葉を聞いて先輩は困惑した様子で辺りを見渡し始め、やがて僕を見ると口を開いた。

「本当に唆されたわけじゃないって」

「先輩、いい加減僕に本当のことを話してください！」

「いや、だからね」

「先輩っ！！」

「あーもうっ！」

「！？」

先輩は勢いよく立ち上がると、扉に向かって全力ダッシュ。『ベー』と赤い舌を出して、どこかへ行ってしまった。僕は突然の出来事にしばらく呆けていたが、何が起こったか理解すると急いで扉に向かい先輩と先輩を唆した人物を探すために走り出した。

尋問と先輩（後書き）

先輩探しを第一に、先輩を唆した人物を探しに校内を探索することになった。

調理部と僕（前書き）

調理部と僕の話

調理部と僕

「せーんーばーいー！！ どこですかー？ または先輩を唆した人物、出てこないと痛い目に会うぞ！！」

僕はそんなことを少しも恥ずかしいと感じる事もなく、大声で叫びながら廊下を歩いていった。

僕のそんな様子を何事かと思い、教室から出てきた野次馬どもがいたが、そんなもの僕と先輩の固い絆の前にはタワシも同然だった。タワシがこちらを見ている。それが何だというのだろう。

しかし、思う。出てきてと言って素直に出てくる人間なんているのだろうか？ ましてや自分が危機に瀕していると言うのに、出てくる阿呆はいないと思う。

そうなつてくると困ったことがある。さて、どうやって捜したらいいのだろうか？ しばらく考えていた僕は、あることを閃いた。

「そうだ！ 先輩の大好物はプリンじゃないか！？」

思い立ったが吉日。そんな明言があるくらい、行動するって大事じゃないかつ！？ では、モノで釣るという作戦を決行！

僕は素早く調理室の場所を頭の中に思い浮かべると、ズンズンと足音を響かせるように歩き出した。先輩の大好物は手作りに限る。今まで作ってきた中で、どれが一番美味しいと言っていたのかを思い出して作ることにした。

調理室についた僕はまず、調理室の中を確認。

（ほう、調理部員が1人、2人、3人　全員で7人か……　多
くないけど少なくとも無いな）

そしてちょうどいいタイミングな事に、今日はプリンを作るようだった。

「では皆さん、材料の準備は出来ましたか？」

「はい先生！　僕の分の道具と材料がありません！」

「えっ！？　あつそれはすみません……ええーと、あなたのお名前はなんでしたっけ？」

「いやだなーもう先生、僕の名前は君ですよ？　忘れたんですか？」

「あつすいません。今思い出しました。君さんでしたね」

「はいそうです！」

エプロンは常に持ち歩いている。常備しているエプロンをつけて、僕は何気ない顔で調理部員に成りすました。

調理部と僕（後書き）

先輩の大好物は焼きプリン。

しかし！！ 隣を見れば、カスタードプリンの材料じゃないかつ！
？ 目を盗んで、焼プリンを作れるのか！？

調理部と僕 につ

先生が僕にプリンの材料を渡し終わると、先生は僕と調理部員のほうを向いて話を始めた。

「では、黒板に書かれている作り方を元にプリンを作ってください。先生は職員室に戻りますので、最後に調理室を出る人は千錠せんじょうをして職員室に鍵を返しに来て下さい」

「はい！」

調理部の部長だろう女の子が返事をする、先生は職員室に行ってしまった。

「うーん。話がうまく進んでいくなあ……」

どうやって先生の目を盗んでプリンを作ろうかと考えていたところ、先生はちょうどいいタイミングで職員室に行くという。しかも、話を聞いた限りではもう戻って来ることもない。それに、調理部員の皆さんは僕に気がついて気がつかない振り。ようは気になっではいるが声を掛けられない、そんな状態だ。

何だか話がうまく進みすぎている。少々嫌な予感もしたが、僕は気にすることなく焼きプリン作りを開始した。

「材料は揃ったから道具を取ってきてプリンを作るか……」

『カカカカツ』つと、卵を混ぜながら次の作業に移っていく。僕の手際はそれはもう素晴らしかったに違いない。今まで声を掛けてこなかった調理部員の人と話しかけてきた。

「あつあのお……」

「ん？ なに？」

「黒板に書いてある作り方を見ても、うまく出来ないんですけど……」

「えっ？ ああカラメルソース？ あれはねえ焦げないようにする為には、中火でいっきに混ぜてしまった方がいいんだよ」

「そうなんですか？ ありがとうございます！ 試してみます！」

一人にアドバイスをおくって緊張がようやく解けてきたんだろう。話しかけてきた人以外の調理部員の人たちが話しかけてきた。その中には調理部の部長だろうと思う人もいた。

「プリン作るのうまいんですね！」

「うんまあそうだね。僕には食べさせてあげたい人がいるからね。想う気持ちってすごいんだよ、おかげでプリンもそれ以外もすぐにうまく作れるようになったし」

「想う気持ちですか？」

「そう！ 想う気持ち！ 今作っているプリンだって先輩をモノで釣るため……いや、あげようと思って作っているわけだしね！」

「好きなんですか……その先輩のこと？」

「うん好き好き、大好きだよ！　なんたつて先輩は可愛いしね！
それに……僕は先輩にはとてもお世話になったしね……」

僕は先輩が好き嫌いと言ったら、という質問だと思って好きだと答えたのだが、なぜか調理部員の人たちは、『キヤーキヤー』と言って、話を最後まで聞いていなかった。だから僕が小さい声で言った言葉は、調理部員の人たちには聞こえていなかった。

調理部と僕 につ（後書き）

メモ：調理部は今年出来たばかりの部活で、部長は一年、部員も一年で構成された部活動です。

二年生の君は声^{きみ}が掛けにくかったんでしょね。

調理部と僕 さん

さて プリン完成までもうわずかだね。今までしていた会話を止めて、終わりに近づいたプリン作りに意識を集中することにした。

調理部員の人たちと会話をしながらも、手を休めることなく動かし続けていた僕はプリンを焼くだけになっていた。普通のプリンも焼プリンも焼くのだが、僕が作る焼プリンはちよつと違う。普通の焼プリンよりもわざと全体を焦がしているのだ。

時間が無いときは市販のものと同じように焼きこてで焦げ目をつけるが、時間があるときには僕が考え出した焼き方で、オーブンで焦げ目をつける。オーブンで焦げ目をつけることで、市販のものには無い美味しさがあるのだ。

容器にプリンの液を流し入れ、オーブンに入れて時間をセット。ようやく焼き始める。

（焼プリンは焼き終わるまでに時間がかかることが唯一の問題なんだけどね……あっ！？ 焼き終わるころって先輩居ないかもしれないじゃん！？）

「しまったあ！？ プリンを作ることであらうばいで、先輩を捜しているってことをすっかり忘れてたあ！！ しかも、焼き上がる時間をまったく考えていなかったし！？」

「！？ えっどうしたんですか！？」

「あついやこつちの話」

（しかしどうしたものか？　これ以上プリン作りに時間を割けないぞ……よし！）

「ねえ君たち、僕が今オーブンの中に入れているプリンなんだけど、時間がきたらタイマーが鳴るから、そうしたらここに居る人たちで分けて食べてくれないかな？」

「……いいんですか？」

「いいのいいの！　僕はこれから忙しいからここには戻ってこれないと思うんだ。だったら、ここに居る人たちで食べてもらえたほうがいいと思ってね」

「分かりました！　じゃあいただきます！」

「うん。礼儀正しくていいね」

僕はそう言つと、嵌めていたエプロンを脱いで制服のポケットに入る。そして廊下に飛び出して走り出した。脇道にそれちゃったけど、本題の先輩捜しを再開した。

調理部と僕　さん（後書き）

職員室に鍵を返しに来るのが遅いため先生が心配して調理部を見に来たところ、調理部員の人たちが君きみの作ったプリンを囲んでおり、先生は君が作ったプリンを食べて感動したそう。

その後しばらく、指名手配犯のように掲示板に『君きみを捜しています』という張り紙がされていたそうです。

月刊ピエロと先輩（前書き）

部室を飛び出した先輩のお話

月刊ピエロと先輩

特に理由はなかったが、私は思わず逃げ出した。

私の後輩である君は少々思い込みが激しいところがある。今回の出来事は誰かに唆されてやったんだろうと信じて疑わない。

あの子は優しいのだが、その優しさが変な方向に働いたために話の食い違いが起こってしまった。唆されてはいないと説明しようにも、まず話を聞いて貰えなかったから今回はさらに手に終えない。

「なんと言ったら納得してくれるのかな？」

私はそう呟きながら3年生の廊下を歩く。廊下に備え付けてある時計で時間を確認すれば、4時35分。もうすぐ5時になる。

「もうそんな時間なのかー」

私はまた独り言を言いながら廊下を歩いていく。特に理由もなく飛び出して来てしまったが、これが良かったのかもしれない。私は何か良い言い訳が思いつくかもしれないし、君が考えを改めてくれるかもしれない。

（君には絶対に……昨日読んでいたマンガに描写されていたことを真似したら、同じ様な事が起こるかななんて理由で試したなんて事を悟られないようにしないと……）

昨日読んでいたマンガ。月刊ピエロは、主に少女マンガしか載っていない。しかも、高校生の恋愛モノが多いため、一部読者からは高

い支持を得ている。そんな月刊ピエロのあるひとつのシーンがどうしても気になってしまい、試してしまったのだ。

そんな事は口が裂けても、君には言えなかった。

しばらく歩いていると私の教室に来たが誰もいない。いつもならこんな時間でも、結構な人数が残っているはずなんだけど……

「……おかしいなあ。今日の君といい、今日のみんなの態度といい、私に内緒で何かやってるのかな？」

君いわく、私の勘は良く当たるらしい。確かに、埋蔵金を見つけたり温泉を見つけたりとしたが、特におかしなことだとは思わない。だって、私の家族は私よりももっとすごいんだから。

そして、私はくるつと振り返りもと来た道を戻り始めた。なぜか戻らないといけない気がしたけれど、私にはよく分からない感覚だった。戻り始めてしばらくして、私は空き教室の一つに入った。

空き教室には私のクラスの人たちが全員集合していた。

月刊ピエロと先輩（後書き）

メモ：月刊ピエロは毎月20日発売の、大人気雑誌。先輩も数年前からのかなりの愛読者の様子。

鈴木5号と僕（前書き）

はつきり言って、解説をしている僕のお話

鈴木5号と僕

僕は調理室を勢いよく飛び出してきたはいいけれど、どこに向かえばいいのかまったく見当がつかなかった。

（それもそうだ、先輩の居場所が分かるなんてそんな嬉しいこととがあつていいわけが無い。いや、あつて欲しいなあ……）

（そうだなあ……とりあえず猫は高いところに逃げたがるし、上の階に行ってみるか。三年生の教室も上の階にあるから、何か情報を手に入れられるかもしれない！）

上の階に上がることに決めて、僕は廊下を歩き出した。今いる場所は2階。僕たち二年生の教室があるのも2階だから僕は今、二年生の教室が並んでいる教室棟を歩いていることになる。

話は変わるが、僕らが通っている高校は下校義務があり、午後19時を過ぎなければ下校をしてはいけない決まりになっている。早退などの仕方のない理由があれば帰れるのだが、少しでも元気ならば下校時刻が来るまで高校から離れられない。

こんな義務が無くても高校生は高校に残っている人が多いのであまり関係ない。特に僕は先輩と一緒にいることができる時間が長くなるため、この決まりを作った人物を表彰したいとも考えていた。そんなこんなで、部活が無い生徒は教室に残っているのが主だった。

しばらく歩いていたが、不意に声が聞こえてきた。無視しても良かったんだが、声が聞こえてくればそちらの方を振り向きたくなくなってしまう。ましてやそれが、野太い声の悲鳴であつたとしても……

「どうしたの？」

僕は廊下側の窓を開け、悲鳴が上がった教室を覗き込んだ。覗き込んだのはいいが、どうして悲鳴が上がったのか理由が分からずに小首を傾げるだけになった。

教室の中は他の教室とも一切変わらずきちんと机は並べられているし、席替えをしている最中というだけでおかしなことはない。おかしな事と言えば、このクラスに集められている人だけか……

鈴木5号と僕（後書き）

校則第一条、生徒午後19時まで下校を禁ず。校則違反は空気椅子で勉強に取り組むべし！

校則第一条を破れば、上のとおりになります。朝から晩まで空気椅子。出来なかったら、正座に変更して授業を受けます。

まあ、あるクラスは進んで空気椅子をしていますか……

鈴木5号と僕 につ（前書き）

はつきり言って、解説をしている僕のお話

鈴木5号と僕 につ

「なにがあつた鈴木5号？」

僕がそう言つた瞬間、教室にいた生徒は一人残らず僕の方を振り返つた。

（怖い怖すぎる！ 教室にいる全員が一度に振り返ると、ここまで怖いとは知らなかった！？ 僕は鈴木5号を呼んだつもりだったんだけど、まさか全員が振り返つてくるとは……まあ無理はないけど……）

この高校のおかしな校則その二が、氏名統一性だった。

この決まりを分かりやすく言うと、全国で一番多い氏名のベスト6位は、同じ氏名の者と同じ教室になる。例えば僕が今覗き込んでいる教室は二年鈴木組。鈴木さんだけが集まってできたクラスだ。

佐藤鈴木高橋田中渡辺伊藤。上から順に多い氏名なのだが、一つの学年に普通のクラスとは別に、この6つの氏名統一性のクラスが存在している。

まあ別にいくら集められたところで、一つの教室に同じ個性の者が集まるとは無い。が、この二年鈴木組はそうはいかなかった。

二年鈴木組総勢40名に対し、普通の一般人は一名だった。鈴木5号もとい鈴木^{すすき}鈴音^{すずがね}。僕の友達の鈴音は例外的に普通な生徒だったが、残りの39名は皆、ボディビルダー志望のムキムキマツチヨな

人種だった。

ビクツつとなりながらも、何とか平常心でいられた僕はまだ良い方だろう。風の噂で聞いた話しでは、女子生徒が野暮用で二年鈴木組を訊ねて声をかけたところ、一度に振り返られてその場にいた数名の生徒も含めて心臓発作で救急車と緊急医療器具のお世話になったそう。

この話は先輩に聞いたので、風の噂というよりはもはや真実なんだろう。しかし僕も実際に体験して分かったが、こんなに恐ろしいものだったとは……

鈴木5号と僕 につ（後書き）

校則第二条、佐藤鈴木高橋田中渡辺伊藤。これらの性の者を集め学ばせるべし。反対意見は却下とす。

普通ならば同じ個性の者はクラスに数名つて所なんでしょうが、なにを間違ったのでしょうか、同じ個性のものが揃ってしまいました。真面目で勉強熱心な彼らなんです、溢れんばかりの筋肉が印象を悪くしてしまい、筋肉の巣窟と呼ばれており、命知らずの勇者が良く感染して戻ってきます。

他人事ならば、あなたが間違っていないですね。

鈴木5号と僕 さん（前書き）

鈴音と僕の話

鈴木5号と僕 さん

「すみません……鈴音を呼んで貰えますか？」

僕は窓際が一番近くにいた鈴木マツスルに声をかけた。

「ふむ……君はなかなかいいものを持っているね。その上腕二頭筋なんて、少し鍛えればすぐに答えてくれるし、かなりのものになる。どうだい？ 今から軽くベンチプレスでもしないかね？」

「鈴音 つー！」

「その声は俺のマイ・スイート・ハニーっ！？ ここだっ！ この筋肉の下だ助けてくれっー！」

僕の呼びかけに、すぐに返事が帰ってきた。どうやら教室にある筋肉の塊の下には、僕の友達が生き埋めにされているらしい。すぐにも助けてやりたいのだが、先輩が生き埋めにされている訳でもないから、火事場の馬鹿力は発動しそうにない。

「すまないが自力で来てくれ！ 少なくとも僕はそこに行くまでに、上腕二頭筋を鍛えたくらいではどうにもならない！」

「見捨てて逃げようとしなかったただけ在り難い。お前がそこにいる限り、もう死を覚悟する事もないな！」

そう言った鈴音は、『うおおっー！』と、雄たけびを上げながら肉の塊を持ち上げて見せた。

「「「おおっ」「」」

僕も含めて、鈴木マッスルの皆さんから驚きと賞賛の声が上がる。

先輩が僕にとってそうであるように、鈴音の火事場の馬鹿力の発動の条件は、どうやら僕らしい。その事に気がつかされたのも、つい最近のことなのだが。

鈴音は、筋肉の塊を床にポイッと投げ捨てると、僕のほうに歩み寄ってきた。

言い忘れたかも知れないが、鈴音は女の子だ。細腕で二の腕ぶにぶにの可愛い女の子だが、その細腕のどこから発揮しているのだろうと思わせるくらいの、力持ちだ。

今の筋肉の塊も、数百キロはあるだろうが、持ち上げて見せた。賞賛の声が上がるのも無理はない。

ちなみの彼女、時期表番長の有力株だ。現表番長からの信頼と期待が高いと聞いている。

「俺のハニー。俺にどんな用だったのかな？」

「あついや、鈴木マッスルの悲鳴が聞こえてきたからね、ちょっと覗いてみたんだ」

「……そう……」

鈴音があきらかにガツカリした理由が分からず、僕は首を傾げるだけだった。

鈴木5号と僕 さん（後書き）

鈴音。恋する乙女です。二年鈴木組では唯一の女の子。

ちなみに気が付いている人もいるかも知れませんが、この物語では名前は出てきません。みんな一人称・雰囲気・肩書きなどが名前のようになっています。（名前を付けることにしました）

表番長という単語が出てきましたが、先の話で出てきます！

鈴木5号と僕 しい（前書き）

鈴音と僕の話

鈴木5号と僕　しい

「あつそつだ先輩を見ていない？　今捜しているんだけど、どこにも見当たらなくて！」

「ゆるほに先輩……？」

鈴音の片眉がピクツつと上がり、嫌そうな顔をしたが僕は気がつかない。気が付かないまま、僕は喋り続けた。

「そつ先輩！　部活をしていたら、飛び出していちゃったんだ。その前にいつもなら先輩がしないような行動を取っていたから、誰かが唆そそのかしたか誑たぶらかしたに違いない！　先輩はその辺に疎いからね」

「へーそつなんだ……ところでいなくなちゃった先輩と、押しつぶされていた俺、どっちが大切？」

「……？　いきなりなにを聞いてくるの？　どちらが大切かと言えば、先輩に決まっぺ　っ！？」

先輩と言った瞬間に僕はデコピンを貰い、廊下をバウンド。そしてクルクルと回転しながら壁にぶつかるまで、デコピンの勢いは止まらなかった。

「ふんっいい気味だ！　自分が何を言ったのか深く考えてからまた俺に会いに来たならば、話くらいしてやっても……あれ？　君っどうした！？」

壁にぶつかつたままの姿勢でまったく動かなくなってしまった僕のところへ、鈴音が急いで掛けよってきた。

「あうあう……」

気絶するほんの少し前、僕は少々恥ずかしい言葉を口にしながら気絶してしまった。

気がつくと保健室。隣には鈴音が腰掛けていた。

彼女は疲れたのか、イスに座っていながら眠っている。起きている姿も眠っている姿も可愛いのに……なんてことは言えない。でも、

「先輩が横にいてくれたなら……はぶうう!？」

鈴音は眠っていたはずなのに、いきなり僕のあごに掌底。眠っていたはずだよね!？ と、思いながらまたまた気絶という名の深い眠りについてしまった。

起きたら家という展開は良くあるのだろうか？ 起きたら本当に家だった。時間と日付を確認。良かったまだ日付は変わっていない。

「今日一日何をしていたんだろう？ まったく思い出せない。何か重要なことがあったような気がするけど、朝玄関を出た瞬間までしか思い出せないぞ」

良いことなのか悪いことなのか、僕の今日一日分の記憶が抜け落ち

て
い
た。

鈴木5号と僕 しい（後書き）

君の記憶が一部なくなった事により、先輩と僕の関係はいつもどおりになりました。

君が家に帰るまでが分かりました。ですが先輩は？

表番長と先輩（前書き）

表番長と先輩の話

表番長と先輩

空き教室には私のクラスの人たちが私を抜き、全員集合していた。放課後なのだから、席を自由に立っていてもいいし歩き回っていても誰も咎める者はいない。しかし私のクラスの人たちは全員椅子に座っていた。

正確に言うならば、自分の椅子に座っているプラス、椅子の上で正座をしていた。

「……なにしているの？」

「しっ……静かにして！」

私は一番近くにいたクラスメイトに声をかけたが、人差し指を口元に持って行き、静かだというゼスチャーで制されてしまった。

驚いていたのも一瞬で、すぐに頭を回転させなにをしているのか答えを導き出そうとした。

（何かの遊び？ でもみんな神妙な顔つきで正座しているし。みんなで宗教？ 椅子の上に正座をする宗教なんて聞いた事がない……）

そんなことを考えたところで、答えのほうから私に近づいて来た。

「おつたんばちゃんじゃないか？ キミは教室に残っていなかったから巻き添えで怒られるのを免れたようだね。いや、実にタイミングがいいな！」

大きな声ではきはきと。老若男女、本当に聞き取りやすい声というのはこういう声なのだろうと思わせる声で私にそう話しかけてきた声には、聞き覚えがあった。

私があけた扉から私に続くように入ってきた彼女は、全身から自信が漲っているのが見て分かる。自信の塊のような彼女は、私の通う高校なら いや、こちら辺の地域に住んでいてその名を知らないほうがおかしいとも言える。

表番長。それが彼女を自信の塊と押し上げたあだ名であり、道中蛇誇みこ、それが彼女の名前であった。

「えっみこちゃん？ どうしてここに とうか、怒られるって何の事？」

怒ると言っただけの彼女の言葉が理解する事が出来ず、かつ彼女がこの場所にいるという事が私をさらに混乱させた。

表番長と先輩（後書き）

メモ：表番長は代々最強という証であり、表番長になり後継者が現れると引き継がれていく。性別や年齢は関係なく、高校を卒業しても後継者が現れない場合は継続して表番長と呼ばれる。

現表番長は歴代最強と呼ばれており、鈴木5号を後継者として熱心に教育中。

表番長と先輩 につ（前書き）

表番長と先輩の話

表番長と先輩 につ

「あついや、怒ると言ってもそんな大した理由じゃない。今月の我が高の生活目標が掃除の徹底という事はキミも知っているだろう？ その事の関係する事なんだけど、キミを除くこのクラスの生徒は白昼堂々とサボってね」

「えっ!？」

私は掃除時間、なぜか校長先生の部屋を掃除する事になっているのでクラスみんながどのように掃除をしているかなんて知らなかった。というか、全員でサボるという発想はまったく出てこない。

しかし私はここで、何か理由のあった事ではないのかと思ったが、すでに事情聴衆を済ませているらしい彼女から違う違うと、首を振って私の考えを否定された。

では何かと聞いたところ、集団心理が働いたのだと聞かされ私は納得した。

さて掃除の時間になった、掃除に行こう。でも周りの奴らが行かないからまだいいだろう。そんな集団心理が働き、ずるずると掃除に行かなくなったそう。

一日二日ならまだ分かる。しかし、もう一週間も連続で連続でサボっていればどこからか呼びがかかるのもわけなかった。

「たんぽちゃんとは話がしたいし、良かったら今日は一緒に帰りたいところなんだけどね……残念ながらこいつらの説教が残ってい

てね。また今度一緒に喫茶店にでも行こうじゃないか！」

強引だけど決して相手が嫌がるような強要はさせない。それこそが彼女の魅力であった。

「うん分かった！　じゃあ今度ね！」

「そうだね。うんキミは改めていい子だ」

うんうんと頷きながら、彼女は私の頭を撫でてきた。

「わっ！　ちょ私は子供じゃないよ！」

「いや……可愛らしくてつい　　ね」

ほほえましい空間が一瞬にして出来上がってしまった。正座をしているサボり組みもほほえましく感じていたところ、お説教の開始の合図をじゃあねーの一言で下ろし、たんぽぽは帰ってしまった。

「さて、裏番長が掲げた今月の目標を堂々とサボってくれたお前たちはどんな説教が欲しい？　お前らだけ校則の強化……は、ぬるいな」

「ではこれなんてどうだろう？　50キロマラソン。優勝者には10万円の優勝金。参加費は各自負担として手続きをしておこう。なに、5万メートル走れば済む話だ。簡単にシンプルだろう？」

「サボったりは考えるなよ？　お前たちが一番私のあだ名の意味を

理解しているだろう？ 同じクラスだからな」

たんぽぽの知らないところで、ムンクの叫びが出来上がっていた。
しかし数は38と少しばかり多いが。

表番長と先輩 につ（後書き）

表番長もとい蛇誇の日課は肅正で、よく不良どもの首根っこを捕まえては引きずり回しています。

ところで鈴音が言っていたゆるほに先輩とは、ゆるゆるほにほに先輩から来ている。誰とでも仲良しなたんぼぼは、近寄りがたい才一ヲを出している蛇誇とも仲良しで大親友です。

表番長が言った裏番長は、いつか出てくると思います。それと先輩はしばらく校内をうろついた後、家に帰ります。

肉まんと僕（前書き）

肉まんと先輩と僕の話

肉まんと僕

「……寒い」

制服の上からコートを羽織りマフラーを何十にも巻いて家を出た僕は、あまりの寒さに思わず思考が漏れ出していた。

別に誰も聞いているわけではないのだが、無性に恥ずかしくなった僕は顔を赤くしながらコンビニに急いだ。

「肉まん二つ！」

「はいよ」

コンビニについた僕は真っ先にレジに向かい、肉まんを頼んだ。

寒くなると布団から出たくなってしまう為、ご飯を食べないまま家を出ていつもぎりぎりに登校してしまう。

「どうにかして早起きできないかなあ」

ま、無理なんだけど。という言葉は口には出さない。

「寒い寒い熱い熱い」

コンビニから出て寒いと言ったり、肉まんを食べて熱いと言ったり、忙しいと言ったらありゃしない。

でも今朝は 遅刻ぎりぎり登校して良かったと思った。

「ちこくだよー」

もたもたと、先輩が曲がり角から走って出てきたからだ。

「あっ」

口には食パン一斤を咥えた先輩は、曲がり角で盛大にこけたと思ったら、咥えていた一斤を道に落とし、ころころと転がって行った一斤はとうとう用水路の中に落ちてしまった。

「せつ先輩大丈夫ですか？」

慌てて駆けつけた僕は倒れた先輩を起こしながら、怪我をしていないか素早く確認したが表面上の怪我は無いみたいだった。

「だっだいじょうブイ！」

指を二本突き出した先輩の体を張ったギャグなのかもしれない。

（こっこれは……笑った方がいいのか笑わずに冷静に怪我がない事を聞くべきか……）

「あー私のパンがない！？ どこにっ」

（一斤とは呼ばずパンと呼ぶ。これは一斤と言ったら死亡フラグな

んだろうな)

「先輩のパンなら用水路に落ちてしまいましたよ？　もし良かったら、僕の肉まん食べますか？」

先輩じゃなくてもあまりにも可哀想なので言っていただろうセリフなのだが

「いいの？」

ぱっちりお目目をきらきらさせて、僕に上目遣いで尋ねてきた。うつ何だこれは、反則じゃないのか！？

「差し上げよう」

「わーい」

肉まんを渡したら、さっそくほくほくさせて食べる先輩。見ていて和み……いや芸術ですね！

「先輩、雪が積もっているんですから、走らないで下さい。こけますよ？」

「私ならだいじょうブイ！」

(流行っているのかな？　もしかして僕だけ時代遅れ？)

そう言って軽く飛び跳ねた先輩は、こけた。

僕の方に背中から倒れこんで来るようにこけた先輩を優しくキャッチ。その反動で先輩の口から肉まんが飛んでしまった。

飛んで飛んで……僕の口に収まった。

なんというミラクル。動画を取ってテレビに送りたい位の出来事だったのだが、僕は肝心な事を忘れていた。その事にいち早く気が付いたのは先輩で。

「……ッ!？」

「どうしました先輩っ！ 顔が真っ赤ですよ！」

「かつか……」

「か？」

「なんでもないっ!!」

僕の手を振りほどき、先輩は物凄い速さで学校に行ってしまった。一人ポツンと残された僕は、口から先輩が食べていた肉まんが落ちていく事にも気が付かず、呆然と立ち尽くした。

肉まんと僕（後書き）

ようやく文章を書く事にも慣れてきたので、みなさんに恥ずかしくないような文章を見せる事ができるので、安心していきます。

書いていて、先輩も僕も今までと雰囲気も性格も違うっ！？ と、書いてしまってから気が付きました。今までの雰囲気や性格は忘れていただき、これが本当の性格なんだと無理な話かもしれませんが思ってください。

人物紹介 01（前書き）

人物紹介です。

これから人物は登場しますし、今登場している人物の新たな一面が出てくるかもしれません。

そうなるたびに、人物紹介をして行こうかと思っています。

人物紹介 01

赤井 君 あかい きみ

『誰に対しても気さくに話しかけられる、それが全くの他人でも動じる事はない。顔を赤くし動揺し困っている時こそ、君の傍にいろだろう』

元、君。二年生。語り部であり、主人公。かな？

先輩の為ならば、例え火の中水の中。先輩がいると火事場の馬鹿力を使用可能。先輩の為ならば人間の限界を超えて、宇宙まで飛んで行きそうです。

日向 蒲公英 ひなた たんぽぽ

『日が当たる所にたんぽぽが咲いている。いつも笑顔を振りまき、その笑顔で慕われる。たんぽぽの周りにはいつも日がさしている』

元、先輩。三年生。語り部であり、主人公。かな？

ゆるゆるふわふわとしている先輩。誰に対しても優しい為、一・二・三年生から、女神として崇められている事も。勘が鋭く、温泉などを掘り当てた事がある。家族はもっとすごいらしい。蒲公英という自分の漢字が嫌いで、名前を書く時はひらがな。

皆 太陽 みな たいよう

『つねに太陽のように元気に明るく輝いている。困難、試練、そんな小さなものは太陽の前では意味はなさない』

元、熱血君。二年生。君と同じクラス。

誰からも愛されるクラスのムードメーカー。購買部にたんぽぽがい
る事を君に隠そうとして、出来なかった事を後悔している。理由は
手作り弁当を分けてもらっていたから。

道中 どうちゆう 蛇誇 みち

『歩む道はどんなに険しかろうと阻まれようと、蛇のごとくしづと
く誇らしげに、我が道を行く。蛇は災いの元なのか、否、安心を与
える事も神様にだってなれる』

元、表番長。三年生。肅正。

地元では名前を知らないものはいない、お掃除屋さん。（不良の）
たんぽぽの事をえらく気に入っている。そのわけは……？

鈴木 すずき 鈴木 すずがね
鈴音

『耳を澄ますと聞こえてくる、安心できる毎日の始まり終わりを告
げるその音が。いつも耳にするその音だからこそ、無くてはならな
い』

元、鈴木5号。二年生。鈴木組。

力の強い女の子。どうしてこんなに力が強いのかは、本人にも分かっていない。ただ、親の所為ではないのかと疑っている。

人物紹介 01（後書き）

今まで書いてきた話を手直ししていきますので、よろしかったら見直してみてください。

再購買部戦争と先輩（前書き）

またまた購買部戦争と先輩の話

再購買部戦争と先輩

（もう　　すぐだ）

腕を組み目を閉じる。そして、体内時計で時間を測る。

（もうすぐ……もうすぐ時間になる）

額にうつすら汗がにじんできた。そして時間を知らせる鐘が辺りいっただいに鳴り響く。

『きーんこーんかーんこーん』

そう、この鐘こそが始まりの合図だ。

「おい君！　今日も行くんだろっ、購買部」

僕にそう声をかけてきたのは太陽、購買部戦争の常連でつわものと名高い一人だ。

（だが、まだだ。まだ時間ではない）

「おい！　聞いているかー？」

（聞こえているよ。少し静かにしてくれないかなあ……今集中しているんだから）

体内時計で時間を測り、ベストな時間が来るのを待つ。残り3秒、2秒、1秒。そして、ようやくその時が来た。

「うむ、それでは出陣じゃ！」

「はっ！　かしこまりました！」

勢いよく立ち上がった僕は、立ち上がった拍子に今まで座っていた椅子が飛んでいく事を気にも留めない。

今の僕は、戦国武將の用に気持ちは高ぶっている。というか、僕と太陽は思わず場違いなセリフ　まあ間違っではないが、口にしていた。

戦場もとい購買部に来た僕は、エプロンを付けながら売り子を始めようとすると先輩を見つけると、体内時計の精度が落ちていない事を実感する。

先輩が購買部の売り子のバイトをしている事を知ってから、僕は通い詰めるかのようにほとんど購買部に顔を出していた。そして、より効率を求める為に聞き込みを怠らなかった。

先輩がバイトをしている曜日と入る時間の聞き込み。主にどのような商品が売れているのか、どのタイミングでお金を渡すと先輩に受

け取ってもらえるのか。

緻密に計算、聞き込みを重ねた僕には死角はなかった。

と、思っていた僕だったが、実は大きな見落としがあり、僕の頭を悩ませる事となった。

『先輩に近づけるのって、お金を渡すときだけじゃん！』

再購買部戦争と先輩（後書き）

また購買部戦争の話です。書いていて、君のキャラがわからないです。彼、どんなキャラなんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171x/>

先輩と僕

2011年12月20日13時50分発行